

私のフィールドワーク／フィールドワークの私

松嶋秀明
(滋賀県立大学)

こんにちは、松嶋秀明と申します。滋賀県立大学というところにおります。私は、一応、臨床心理学が専攻ということになっているんですが、そのなかで、大学院時代、非行少年の更生というところに興味がありました。で、更生保護施設というところがあるのですね。後からでてきますけれども。そこで、3年半ほどフィールドワークをしておりまして、その過程を最近、あの、といっても1年前になるのですが本になりました(『関係性のなかの非行少年』新曜社)。で、それを松本さんにも読んでいただいて、今日の会に声をかけていただいたという次第です。

現在は、滋賀県におりますが、学校現場、非行少年の施設だけではなくて、更生というルートにのる以前の学校現場において、どうやって先生方を支援していくかということをやっています。自分自身は実践家として、スクールカウンセラーという職業をやっているのですが、そのなかで学校をどのようにみていき、どのように援助するのか、その過程を、自分も含み込んでいかに記述するのかということを考えています。

で、今回は私のフィールドワークということなのですが、私にとってフィールドといえるのは、大学院時代のフィールドワークと、今の、いくつかの中学校に関わらせてもらって、そこでみんなに不登校や非行について関わっていこうという雰囲気をつくろうという、運動というか、活動をしておりまして、それを、そのなかで自分に見えてきたことをどういかしていけるのか。ま、今日はそのフィールドワークの過程を、ダイジェストのように

お話させていただければと思います。

私のフィールドワークということで、何から話そうかと思っているのですが、ひとつは「フィールドワーク」って、いま、よく言われていて、質的研究というの、すごく、あの、僕がやってる時というのは「松嶋君、心理学やめたん？」っていわれたこともあるんですが、いまや心理学のなかでもフィールドワークをやる、質的研究をやるといっても、ああそうなんだと一応は納得してもらえると、広まってきたという、そういう環境にいると思います。

だけど、中身については、さきほどの松本さんのお話にもあったように、それほどつめて議論されるということはないなあと思っています。特に、フィールドワークというのは、フィールドの中に入っていってみるという点は議論されるのかなとは思いますが、「書くこと」ということも重要なひとつの要素としてあると思います。

「書くこと」に関して、「フィールドワーク研究ってどういう貢献をするの？」という問いがある。「フィールドワークや質的研究って、たしかに読むと面白いのだけれど、いったい何の役にたつの？」という問いかけをされることが多い。それで、質的研究をする人のなかにも、生真面目に、それに答えようとする人がいて「質的研究はどう役にたつのか？」というシンポが学会でも林立していたりする。私はなかば食傷気味なのですが、その際の、「役に立つ」ということも、それまでのいわゆる実証的研究のように、なにかひとつの完成物があって、これができたからこれを使ってください、これを適用してくださいというかたちではない。そうではなくて、もっと違うかたちがあるのではないかと考えています。で、「フィールドワークを書く」ということは、それに深く関わっているように思うのですね。ま、書くというか、書けるようになるというか。そういうことを最近思っています。この「役に立つ」については、最後にあらためてふりかえります。

さて、「書く」とはどういうことなのか、から考えてみましょう。「書くことと見ること」と書かせてもらいましたが、これはハーブバレンヌという人が“Successful failure”という、まあ、失敗者というのはどういうふうに出てくるのか、ということを丹念にエスノグラフィーで記述した本があるのですが、そのなかで出している図があるのですが、これが何に見えるのだろうか？という話です。これは本当は授業場面なんです。で、みんなは本を読んでいるというふうに、例えば先生からみればそう見えることもあるでしょう。でも、

例えば、僕は小さい頃、授業のなかで活躍できるタイプというよりは、ボーッとしてこの子大丈夫かなと思われるような子だったのですが、結構、この感じの子のように、ただ「本を見つめている」という方があっているという場合もあるでしょう。本を見るふりをしながらいろいろ空想するとか、ですね。ま、要するに言いたいことは、「フィールドワークで見えたこと」とい

うのをどう書くか、どう言葉にするのか、ということによってこの場で何をやっているのかということもまた変わってくるということですね。そういうことがある。

だから、その場にいったらみれば、そのものがあるのだから、見ればみんなが納得するというものではない。そこにどんな意味があるのか？その意味を見に行くというのがフィールドワークだと思っているのですけれど、ですから、意味というのはやっぱり書かないとわからない。だからビデオなど、テクノロジーが発展していますね。昔は、こんな（ハンディタイプの）ビデオがあるだけですごく便利だったんだけど、今はそうじゃなくてパソコンと一体型ですね、フィールドノートをつけながら同時にビデオが撮れるということもできる。そういうふうなことがあるんですけども、ビデオを撮るということとはできても、そこに映っていることにどんな意味があるのか、ということとはわからない。みなさんご存知だと思いますが、Geertz が「ぶあつい記述」ということを言っていて、意味を記述するにはビデオやカメラでは駄目なんだということをいうのですが、このように「書くこと」というのは大事なかなと思っています。

それから、Van=Mannen がフィールドワークについて書く中でいっていることですが、そのなかでは私も「リアリズム」の立場に近いんですが、なにかものを見にいったら、ビデオやテープにとって、それを素材にして議論

書くこと／見ること



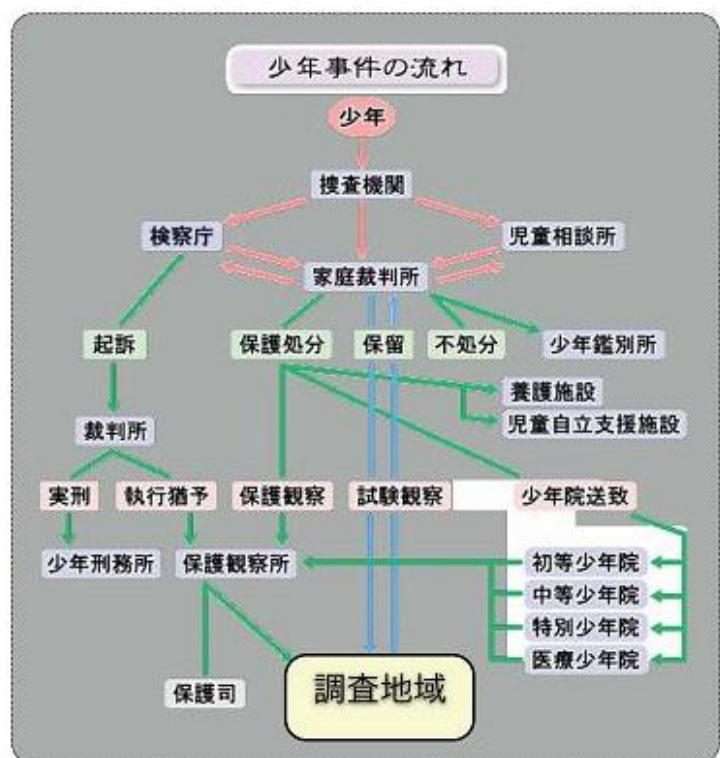
「写实的物語 (realist tales)」
「告白体の物語 (confessional tales)」
「印象派の物語 (impressionist tales)」

透明なフィールドワーカー？

- エスノグラフィーにおけるリアリズムの最も際立った特徴は、おそらく、テキストの決定稿のほとんどの部分から、ほぼ完全に著者の存在が消えているという点である。……フィールドワーカーは、データの収集作業を終えた後、主としてエスノグラフィー実践の尊敬すべきイメージとイデオロギーが正当化してくれる安定した記述的物語の背後に、たやすくその姿を消し去ってしまう(ヴァン=マナーン, 1999)。

をするということをしているので、一見、客観的な観察をしているように思われるんですけども、実はそういうのは誤りである。「エスノグラフィーにおけるリアリズムの最も際立った特徴は、おそらく、テキストの決定稿のほとんどの部分から、ほぼ完全に著者の存在が消えているという点であろう。……フィールドワーカーは、データの収集作業を終えた後、主としてエスノグラフィー的実践の尊敬すべきイメージとイデオロギーが正当化してくれる安定した記述的物語の背後に、たやすくその姿を消し去ってしまう(ヴァン=マナーネン、1999)。」ということなんですね。著者はどこにいるのかというとファインダーの外にいてということなんですが、それが良しとされる文脈もあれば、そうじゃないこともある。そのなかで、「質的研究」というのは、自分が見にいて、先程の図ではないけれど、自分が主観を投影してそのなかの意味をもってくる。普通の人は見えないことであっても、フィールドワーカーが見にいくと見えるということがある。で、それを書くということが現場をより豊かに記述できるということもあるだろうと思っています。だから、私という存在を消し去るのではなく、むしろ、もっと積極的に意味付けていくということが必要だなと僕は思っています。

さて、自分の研究に入りたいのですが、ここでは全てをお話ししている時間的余裕がないので、詳しくは著書を参照していただくことにして、話が通じる程度に、何をしたのかということだけお話ししたいと思います。非行少年に興味があるといったんですけど、見にいったのはこの更生保護施設というところです(右図参照)。少年が何度も非行をおかしていくと、保護観察ということになるんですが、そのなかで在宅のままでは駄目だろうという少年を施設にいれることもある。そのなかで更生の見込みがあると思われる少年は、社会に返していきま

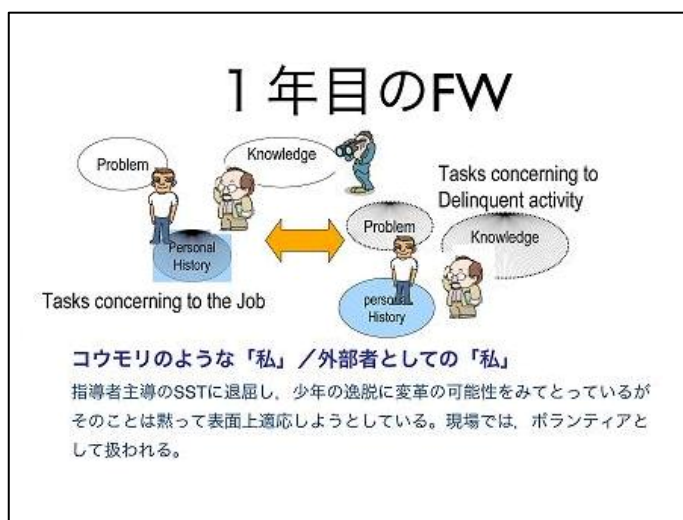


す。この施設のなかで20人くらい、半年くらい暮らすんですね。お昼間は就労して、夜間に心理的なトレーニングをすることがある。で、その心理的なトレーニングのなかで、ソーシャルスキルトレーニングというものを私は主に見ていました。

その3年間くらい見ていたなかで、1年目にすでに論文を書いていた。1年目というのはわりとですね、指導者のロールをとる人と、少年たちとのあいだに権力関係というのがかなり明確にみてとれるという、そういう場でした。少年たちがすこし逸脱的なというか、それた話をするとすぐに修正するし、「こうだろ」「こうだろ」というように、かなり強引に導いていくというふうな感じのやりとりが多かったのです。で、私は、どうしても非行少年に興味をもったのかといえば、大学院に行く前に、ある施設でアルバイトをしていまして、そのなかでいわゆる「非行少年」といわれる人たちと接していたことがあります。彼らは、確かに悪いことをしたというのはしょうがないとしても、また他方では、僕たちよりもある意味では賢いというか、例えば、社会への順応の仕方とか、ある意味で成熟しすぎているからこそ失敗しているという見方もできる。少なくとも、何にも知らずに大学にいていた私たちよりも社会経験がある少年だということを知っていたのです。ところが大学院でトレーニングを受けたときの「非行少年」というのは、非常に、心理的に課題のある、病理的な見方をうえつけられるように私には思われたのですが、私には気に入らなくて、もっと彼らに可能性を見いだしていくような、そんなスタンスの方がいいのではないかと、だから従来の臨床心理学に対しては非常に批判的なスタンスでものをみていたわけですね。

それは今から思えば、片手落ちだったと思うのですが、とにかくそういうスタンスで見にいらいますから「コウモリのような私」と書いてありますが(下図)、とりあえず現場に入れてもらえるだけで幸せで、参与させてもらいつつも、でも、どうもうまくいっているのだろうか?、本当に彼ら、非行少年たちの更生につながるような学びになっているんだろうかということを考えていた。

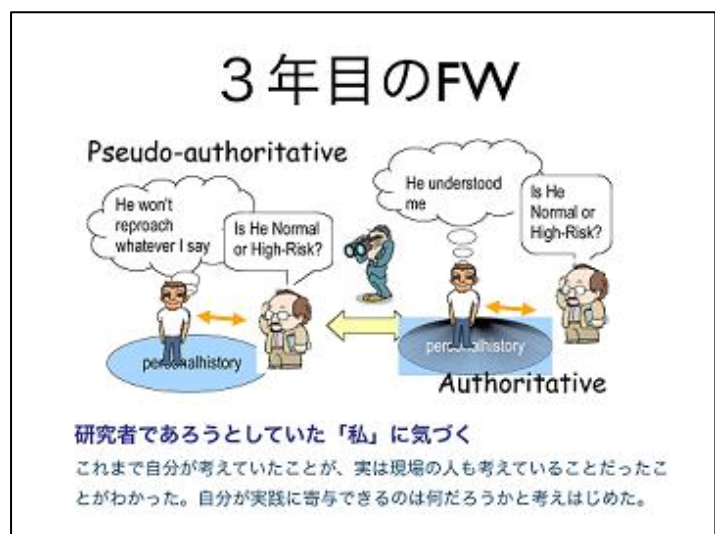
たしかに、(少年たちの振る舞いには)少し逸脱的にみえる部分もあった



わけですが、そこに私は彼らの生活の知恵のような部分がでていように見えるところもあったのです。ただ、それは先生からみれば「間違いだから」ということでバシバシときられていくわけなんです。そうすることが、これは後々わかったことですが、長い目でみればそこで正解を教えていくことが適切な時もあるということがわかったのですが、しかし、その場にいる私には、そのようにバシバシときられていくのが、少年たちの実感に添えているのかなと、少年たちが本当に困っている実感の部分がでていように思うのだけど、それが十分に扱われていないということで残念だなと思って見ていたのです。

それでそのように批判的なスタンスで見ていたのですが、だから、もう少し少年のことをゆっくり聞いてあげるとよいのではないかな、などと思ってたのです。思っていたのですが、3年ほどたちますと、この施設の先生方も学ばれて、けっこう実践のスタイルが変わってくる。どう変わったかという、指導者と少年との上下関係を強調するのではなくて、もっとフラットな形になってきた。つまり、「もっと君たちの理解を知りたいんだ」という方向へ変わってきたということです。もちろん、指導者が主導権は握っているとしても、です。

で、それは僕としてもよかったな—と思ったわけです。実際、僕のことを分かってもらった—ということで満足そうにしている子たちもいました。ところが、その一方で、そのように思いつつも、どうもそれではうまく収まらない少年がいることにも気づいてきたわけです。また、この段階になってようやく先生方ともお話できるようになって、指導方針などについて話してみますと、実は、先生方もまたそのようなジレンマ（しゃべらせたいけれど、主導権をにぎっていなければならない、というような）を感じていらっしやったということに気づいてきたのです。ただ、それは感じていたのですが、なかなか実行にはうつせなかったのだということも語られて、で、私としては、これまで研究者であろうと



して頑張って、いろいろあら探しをしてきたんだけど、どうも実践のなかで行われていることのなかの、かなり偏った部分だけを自分は見ていたのではないかと気づき、それで、もっと豊かなフィールドの意味をみようというふうになったという、そういう3年間の移り変わりがありました。

そのことによってどうなったかという、1年目には私は（施設の人たちから）あくまでもボランティアとして扱われることが多かったんだけど、3年くらいたってくると、だんだん心理学の研究してる人というのが認められてきて、心理学の尺度とかについての質問されることも増えてきた。だから、思いのほか、自分からアピールせずとも研究者としてみられるようになってですね、そうしたことで全体として、現場との関係性が変わってきたかなというわけです。

以上のような経過をみると、「3年間かかってやっとここまできたのか」という見方もできるのですが、私は、でも、1年目に得た結論というものも決して間違いではないだろうなと思うのです。ただし、それをその時に、いきなり先生方の前に出したとしても、それは受け入れられなかっただろうと思います。反発されたりもしたんじゃないでしょうか。つまり、「もっと少年の話をきいてあげたら」などといったとしても、それは確かに大事なことでけれども、現場というのにはある種の葛藤状況のなかにいる。大事なことはわかっているけれども、集団を維持するなかではそうはできないという、そういう葛藤状況におかれていたということが3年経って見えてきた。もし、フラットな関係で話し合えば、少年たちの逸脱はむしろ増えていくことになる。だから、集団で逸脱させないためには、押さえつけてでも逸脱させないでやらせたいという願いと、一方では、少年たちにもっと実感に近い部分でやらせたいという願いもあって、その両方が、相容れないままに、結合しえないままに共存していたというのが現場だったのだろうなということが分かってきたのです。

そういうことが3年経って分かってきましたから、1年目の結論は実践を変えるという効果は持っていたらだろうけれども、その知見がおかれた文脈というのがどんな意味をもっているのかを僕は知らなかった。この3年間でそれが分かったということは、最初にえた結論を、もっと現場に届くような声へと変えるということなんじゃないかと思っています。

なんというか、語り口というか、少年たちの問題をさがして上下関係で聞かせていくと

いうよりも、もっと並行な関係のもとで話を聞いたほうが良いということ、もっと現場に届く声でいえる語り口を身につけられたのではないかと考えています。それは言葉の問題といえそうですが、それを見つけるのには時間がかかった。そしてまた、これまで言ってきた相容れない葛藤というものを持ち続けつつ、それをなんとかバランスをとっていこうとすることというのが、実は、施設の指導員のやっていることなのだなということが分かった時に、私自身が指導員と楽につきあえるようになってきた。先生方を応援できるようなスタンスにたつことができたということがあります。

ここまでの話を理論的にまとめたいんですが……。こんなことかな。

おそらくフィールドのなかには「相容れないもの」があるんだと思います。フィールドに入っていくと、最初、その相容れないものに出会う。そこでフィールドワーカーは相容れないもののうちの片方の極にあることを主張したくなるということがあるんだと思います。つまり、集団でもたせようとしている場にいれば、個人に焦点をあてればいいんじゃないかというふうに。ところが、そのとおりにしていくと、実は、失敗していくということに、実践家の人たちは知っているんだけど、そのことを研究者は知らないということがあるので、その時点での研究者の主張はなかなか受け入れてもらえないということがある。

上述の「相容れないもの」という感覚を、渦中にある研究者はどのように体験しているのだろうか。このことを説明するために、質的研究とも親和性がある「ナラティブ・セラピー」の知見を、補助線として取り入れてみましょう。『ナラティブプラクティスとエキゾティックな人生』（金剛出版）という本には「個人的な失敗」という概念が提唱されています。これは、ただ単に失敗するということとは違う。事例をあげてみると、これはえらい先生（藤岡先生）の体験が本に書かれているものなのですが、こんなふうに書かれている。

「いくら矯正しても、粹にはめようとしても、必ず思惑通りにはならない子がいるから頼もしい。「悪い子」はおもしろいし、クリエイティブなことさえある。」というのですね。これって僕が思ったのと同じようなことといえますね。それから「……。誰も非行少年のことなど本当に気にかけてはいない。目に触れないように、害が自分に及ばないように遠ざけておければそれでよしと内心思っているのであろう。しかも少年院で子どもたちから聞くこと、見ることは、『学校で習わなかったこと』ばかりであった。世の中が平等で、公平なんて嘘八百もはなはだしい。世の中は強い者が勝ち、弱い者がますますひどい目に

あい、しかも声を上げることさえできないところなのだ。筆者は当時そう感じた。これではほとんど非行少年と同じである。」というんですね。要するに、非行少年の方が魅力的というか、世間では悪い悪いというわけなのだけど、そんなことはないし、そういうふうにさせている自分の役割が嫌だと感じ、と。で、それをなんとかしようとしてこの方はアメリカに留学され、いろいろと学んでくるという経験を必要としたのだと書かれています。

要するに、個人的失敗という感覚は、専門職につかれています方であれば誰でもそうなのかもしれないのだけれど、素人の頃感じていた感覚からはいくぶんズレてくる、人として自由にこの人に助けになってあげたいといった感覚をもつと、専門家としては不適格になってしまうという、そういう経験だと思うのです。非行少年に魅力を感じてしまう、この先生の感じ方というのは、一方では私はこの先生の力だと思うのですが、この先生としては非行臨床の専門家としては不適格だと感じてしまう。そして、もしかすると、この専門家の苦悩というのは、私がフィールドワークのなかで見ていたあの施設の指導員の先生方もまた経験していたことではないかなーと思います。社会と自分との関係で悩みつつも、専門家としてやっていく道を探している。そういう葛藤状況にはさまれて身動きがとれなくなっているという、そういう苦悩を経験していたのではないかと。

そこで、私はその葛藤を抱えていくということそれ自体がよいことだと思いますし、そのなかで非行少年に対してなにか言うことがあればいってあげるといふ、そういうスタン

個人的失敗 (personal failure)

『ナラティブセラピーと魅惑的な人生』

個人的失敗 (personal failure) という感覚は、人々が「真実」の人になるための規範を再生産するため、これまでよりももっと熱心に働くように駆り立てる。しかし、にもかかわらず、個人的失敗という感覚はまた、近代的権力そのものが、部分的に失敗しているという例としても理解できる。・・・個人的失敗 (personal failure) の経験は、特定の権力システムの部分的な失敗の反映であると考えることができる。

7

法務技官の個人的失敗

- いくら矯正しても、粹にはめようとしても、必ず思惑通りにはならない子がいるから頼もしい。「悪い子」はおもしろいし、クリエイティブなことさえある。(藤岡, 2004: p239)
- 誰も非行少年のことなど本当に気にかけてはいない。目に触れないように、害が自分に及ばないように遠ざけておけばそれでよしと内心思っているであろう。しかも少年院で子どもたちから聞くこと、見ることは、「学校で習わなかったこと」ばかりであった。世の中が平等で、公平なんて嘘八百もはなはだしい。世の中は強い者が勝ち、弱い者がますますひどい目にあい、しかも声を上げることさえできないところなのだ。筆者は当時そう感じた。これではほとんど非行少年と同じである。(藤岡, 2004: p240)

スというのが先生方にとっては重要だと思うし、それが長い目でみれば少年たちのためにもなるんだろうなと、今の立場になってみれば言えるのですが、しかし、1年目のフィールドワークでえた結論というのは、いわば素人的なそれだったということでしょう。

先生方にしてみれば、当然、もっているんだけれども、それを認めてしまふとなにもできなくなるというようなものだったのだと思います。わからないのはその葛藤の折り合いの付け方だろう。この折り合いをつけるために、バランスをとっていくために何をやればいいのかということ、これを提供するのがフィールドワーカーなのかなと思っています。

倫理的対話

- コードとしての倫理ではなく、現場にあって自分に何ができるか?と自省的に問うような「あり方」としての倫理

1. 現場に参入当初の違和感というかたちで、現場でそれほど意識されていない断片が取り込まれる。
2. 研究者が自らの心身を道員としてそれを噛み砕いて消化しようとする。
3. その過程で、研究者はこれまで現場のことが分かっているつもりで分かっていたなかったと認識する（アイデンティティが定まらない状態を経ることもある）。
4. 現場に受け入れやすい「発達」のストーリーが語れるようになり、それを再呈示する。

さて、そういう視点をえた自分が現在、何をやっているのかということを紹介させてください。いまは小・中学校でスクールカウンセラーをやっています。そして、学校全体として不登校や非行という問題をどうやって抱えていこうかという、そういう課題にとりくんでいます。そのなかで私が気をつけているのは、やはり、学校という場のなかのナラティブをぶあつくする。つまり、ぶあつくとはギアツの「ぶあつい記述」からの流用ですけれども、中学校のなかにはおそらくいくつもの声がある。その声を調停していくとよいのではないか、そういうことを記述していけるようになる、そのようなポジションを自分がとれるようになるために頑張ることというのが、私がフィールドワーカーとして目指すあり方ではないかと思ってやっています。

もう一度いうと、ぶあつくするというのは、あるコミュニティのなか

ぶ厚い記述

- ・ Geertz (1987) 『文化の解釈学』
 - 通常、質的研究における意味の記述の要点を指しているとされている。
 - ナラティブセラピーでは、(DSMの診断名などによって)「うすっぺらく記述」された、患者/クライアントの人生をぶあつく記述しなおすことになる。
- ・ あるコミュニティのなかで焦点があたっておらず、行われているが意味づけられていないものを、見つけだし、意味付けること。とりあえず、なんでもよい。

で焦点があたっておらず、行われているが意味づけられていないものを、見つけだし、意味付けることだといえるでしょう。手始めには、とりあえず、何でもよいからいろんなことを、意味を豊富化するということをしていく。これは例えていえば、水槽のなかに突出した岩のようなものがたくさんあるのが、問題が焦点づけられている状況だとすると、それ以外の場面をぶあつく記述するというのは、その岩の周囲に砂をたしていくというような作業なのですね。岩自体はなくならないけれども、岩は砂に埋もれて目立たなくなるわけです。学校場面に置きなおすと、「あの」問題生徒、「あの」両親といった見方が、相対的に浮かなくなってくるということが有るだろうと思います。とりわけ、いまは発達障害が注目されており、先生方の方が詳しくなって、障害ばかりがクローズアップされるという状況なんだけど、そうじゃなくて、その生徒が生きている生活状況全般をみる、その子自身をどうみるかという視点を増やしてあげると、そういう病理性や障害といったものが目立たなくなるということもあるだろうと思っています。

1つだけ例をあげます。A 中学校。ここは「荒れ」を克服し、子どもと密に関わるということをモットーとするところだった。そこにいくと、「これがA 中学校流」というような考え方があるわけです。子どもと1対1で、もう、とことんつきあうんだというのが、A 中学校の教員たるものそうするんだというのがあった。で、僕がSCとして入ると、担任の関わりを拒否するような生徒がいたのです。「先生となんか会いたくない」という。で、そういう子と担任との仲直りをうながすというような方向性で私は動いていました。それって担任の先生にとってはきっとしんどいことだったろう。でも、「A 中学

参与観察から関与観察へ

● 現在

- 小・中学校でスクールカウンセラー（SC）として活動しつつ、その場を記述する。
- 学校という「場」のナラティブをぶあつくする。→ 偏在するいくつかの「声」を聴きとる
 - 例) A中学の「これがA中流」
 - 例) B中学の「わかってもらえてない」という声

A中学校の物語

- 荒れを克服し、子どもと「関わる」ことを重視する実践。＝「これがA中流」という語り方。
 - ある別室登校生徒は、当初、担任の関わりを拒否していた。私が主に関わりつつ、担任を遊びに引き込んだ。次第に、生徒の態度も変わってきた。ここで「A中流」との語りは、教師の頑張りを支えた（反面、危険もはらんでいる）。
 - 管理職や生徒指導主事は、「いつでも昔の姿にもどる」と語り、現在のA中学の雰囲気には危機感を覚えている。一方で、歴史を共有しない若手教員は危機感を共有できないし、ベテランの新参教員はA中学のやり方が他とは異なっていてやりにくいと感じている。

校流」という物語のおかげで、担任の先生はそれを成し遂げることができた。と同時に、そういう姿があるばかりに、しんどい思いをする先生もまたいる。そういう先生のしんどさをどうするかということが次の課題になっていったという学校でした。ここでも、学校のなかで力のあるナラティブと、そこにおさまらない少数派のナラティブの葛藤があるわけですね。

このように相容れないものを調停するというのがフィールドワーカーの、「あり方としての貢献」だと、僕としてはいいたいのです。何かものを作ってこれ、これを適用しましょうというようなかたちでの貢献ではなく、自分がそのなかで「こんなことができるんじゃないか」と思いつつ動く。相容れない声を聞きながら、そのなかで自分がどういえば両方にとって納得のいく話になるか、そして子どもが救われる話になるかなと考えるということをやっている、と、そういうことをしています。

さて、最後に、私がこのプレゼンテーションの最初でふれた「書く」ということの意味についてもう一度立ち返って、まとめとしたいと思います。今までの話で、何が「書く」ということと関連するのか、ということなんです。このことをいうのに、北山修先生が、黒田先生と対談している次の文章は、大変示唆的です。

「私たちの相手は、患者さんひとりだけなわけで、作家のように、沢山の人たちに評価され、面白いと言われるようなことをやっているわけではないんです。確かに小説家と似たようなことを我々はやっているけれども、決定的に違う部分は、そこですね。手間ひまかかるけれども、小説家のように報われることもなければ、簡単に面白い物語が得られるわけでもない。二者物語と三者物語の違いというのかなあ。ふたりだけで紡ぎ出した物語と、第三者に分かってもらうために紡ぎ出した物語とは違うんです。この二者物語というのは、臨床の場面にしかなくて、誰もがすぐに読んで喜んでもらえるもので

2者物語と3者物語

- 私たちの相手は、患者さんひとりだけなわけで、作家のように、沢山の人たちに評価され、面白いと言われるようなことをやっているわけではないんです。確かに小説家と似たようなことを我々はやっているけれども、決定的に違う部分は、そこですね。手間ひまかかるけれども、小説家のように報われることもなければ、簡単に面白い物語が得られるわけでもない。二者物語と三者物語の違いというのかなあ。ふたりだけで紡ぎ出した物語と、第三者に分かってもらうために紡ぎ出した物語とは違うんです。この二者物語というのは、臨床の場面にしかなくて、誰もがすぐに読んで喜んでもらえるものでもないね (北山・黒木, 2004)。
- それは、患者さんのことでもある(北山, 2004)。

もないね」

これは、僕は、フィールドワークにおいて研究者が「書く」ということと、とてもつながる気がしています。フィールドワーカーが発見することってというのは、たいてい現場の人にとってはもうすでに知っていることなんですね。どんなに少数派の言説であっても、おそらくそうでしょう。例えば、僕が非行少年の施設で「少年の話をもっと聞いたらどうだろう」と思ったことは、現場の先生も思っていたことが後で明らかになりました。そして、と同時に、それが現場の制約によって、そればかりを主張することが現実的ではないことも同時に了解されていったのです。スクールカウンセラー先のA中学でもそうです。どんな生徒にとっても先生が密に1対1で関わってくることがよいとは限らない。なかにはほっといて欲しい人もいるし、とにかく関わればいいというものでもない人もいます。けれど、そうではない先生のあり方というのは、この学校ではなかなか理解を得られないということでもあったのだらうと思います。

北山先生は、他の場所でこうもいっています。つまり、そのように治療者が二者物語を、三者物語にしていくときに感じる、言葉にできなさ、お話にならない感じというのは、実は患者さんもまたそう感じていて、そこで苦しんでいることに他ならない、と。

もう、フィールドワーカーの貢献として「書くこと」を強調したい私の意図もお分かりいただけるのではないのでしょうか。多くの言葉が互いに葛藤をはらみつつ共存している現場にあってフィールドワーカーができることは、あまり顧みられない意見を、多数派にも受け取ることが可能なかたちに咀嚼して、言葉にすることだと思うのです。それが「書けるようになること」と私が言いたいことなのです。

これで私の発表を終わりたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。